農薬の登録内容は頻繁に変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針（http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html）から。
農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）

営農インフォ

営農総合センター　指導販売課 072（444）8001

水稲

◆出穂期以後の水管理

出穂前はやや深水管理とし、穂への養分供給を促す。長期間湛水状態にすると根の活力が低下するので、出穂後は水深2㎝程度の浅水にする。その後、穂ぞろい期に入ると間断かん水で根の活力維持と登熟歩合の向上を図る。

◆病害虫防除

・ウンカ類

9月上旬に田を見回り虫見板や黒い下敷きなどを使って稲の株元をはたき、1株に5頭以上のウンカ類を確認した場合は、トレボン粒剤（*1）（10a当たり2～3kg／収穫21日前まで／3回以内）、トレボン乳剤（*1）（1000～2000倍／収穫14日前まで／3回以内）やアルバリン顆粒水溶剤（*1）（3000倍／収穫7日前まで／3回以内）、エクシードフロアブル（*1）（2000倍／収穫7日前まで／3回以内）等を株元まで十分行き渡るように散布する。

また、アルバリン顆粒水溶剤は、カメムシ類（*1）（2000倍／収穫7日前まで／3回以内）、ツマグロヨコバイ（*1）（3000倍／収穫7日前まで／3回以内）も防除できる。

・斑点米カメムシ類

近年、アカヒゲホソミドリカスミカメ（体長5～6㎜。体は細長く淡緑色。触角が赤い）、ホソハリカメムシ（体長9～11㎜。黄褐色。肩の部分が鋭くとがる）といったカメムシ類の加害による斑点米の被害が増加している。カメムシ類については、出穂後から乳熟期にかけてもみを吸汁されると斑点米の被害が出る。そのため、出穂5～10日後にアルバリン粒剤（*2）（10a当たり3kg／収穫7日前まで／3回以内）などを散布する。

カメムシ類は、畦畔や休耕田のいね科雑草から飛来してくるので、出穂後に畦畔雑草を除草すると、カメムシ類が水田内に移動する。よって出穂2週間前までには、ほ場周辺の畦畔や休耕田の雑草を除草しておく。

・いもち病

常発田やいもち病の発生が予想される田では予防に努める。発生を認めたら、ブラシンバリダフロアブル（*1）（1000倍／収穫14日前まで／2回以内）等を散布する。

乳剤やフロアブル剤等の散布剤を使用する場合は、風の強い日を避け、散布機の圧力を上げすぎない等、ほ場の周囲に飛散しないよう、注意して作業する。

野菜

たまねぎ

◆は種

は種日が早過ぎると「とうだち」や分球が多くなるので、は種適期を守る。主な品種のは種時期は表1のとおりである。

苗立枯病の防除のため、は種床を土壌消毒する場合は、バスアミド微粒剤（*2）（10a当たり20～40kg／は種または定植21日前まで／1回）を均一に散布し、土壌に十分混和した後に散水し、土壌表面だけではなく、土壌混和する深さ（15～25㎝）まで湿らせてからビニールで被覆して7～14日おく。被覆を取り除いてからは種までの間に2回以上耕起し、ガス抜きを行う。

◆育苗

本葉2枚頃までは乾燥に弱いため、10月中旬頃まで晴天の日はかん水する。

また、この時期は、苗立枯病が発生しやすいので、灰色かび病との同時防除をかねて、オーソサイド水和剤80（*3）（600倍／収穫前日まで／5回以内）を散布する。

冬キャベツ

◆定植

定植は9月中旬頃に行う。苗は、育苗期間が約30日で本葉が5～6枚の頃が適期である。定植が遅れると結球が悪くなるので、できるだけ若苗を使う。セル成形苗の場合は、同じ時期には種し、10日前後定植を早くする（本葉3～4枚が適期である）。定植後は、活着するまで十分かん水し、植え傷みを防ぐ。

こまつな

◆病害虫防除

施設栽培で雨が多い場合には白さび病が発生しやすくなるので、ランマンフロアブル（*1）（2000倍／収穫3日前まで／3回以内）等で発生初期に散布を行う。

※ランマンフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。

◆肥培管理

露地では秋雨の害が出やすいので、高うね栽培し、水はけを良くする。

しゅんぎく（施設栽培）

◆病害虫防除

葉の裏に白いカビの発生が見られたらべと病である。年により、激発することがあるので、換気に努め、クプロシールド（*1）（1000～2000倍／―／―）で早期防除を実施する（発病後の散布は十分な効果が見られないので発生前から予防的に散布する）。

マメハモグリバエは、ハウスでは収穫後にうね全面をビニールで被覆し、地表下の温度を上げて地中のさなぎを殺すことにより、高い防除効果が得られる。マメハモグリバエの登録薬剤については表3のとおりである。同じ系統の薬剤を続けて使うと抵抗性がついて効果が低くなるので、ローテーション散布を行う。

※クプロシールドは、野菜類で登録がある。

果樹

みかん

◆翌春の発育枝の確保

今年着果量の少ない樹は、来年の着花（果）過多が心配となる。軸が太いみかんでも品質を無視して遅くまで残し、翌春の発育枝を確保する。また、着果量の多い樹は来年の着花（果）確保と良品質のみかん生産を図ることを目的として、摘果作業の実施に努める。

◆土壌乾燥

品質の良いみかんを作るには、この時期に排水を良くし、土壌を乾燥させる。そのため、敷きわらを取り除き、土壌に日が当たるようにする。

◆病害虫防除

ミカンハダニに加害されると果実の着色が悪くなる。また、ミカンサビダニに加害されると「ちゃんぶくろ」と呼ばれ、果実表面が褐色でがさがさの状態になり商品価値が無くなる。被害が出てからの防除では遅いので、昨年被害の認められた園は、必ず早期の徹底防除を心掛ける。

これらの防除には、8月下旬～9月上旬にダニエモンフロアブル（*1）（4000～6000倍／収穫7日前まで／1回）を散布する。

黒点病は、秋雨前線が停滞し、雨が多くなる9月中旬頃から被害が増える。防除は8月下旬～9月上旬に予防的にペンコゼブ水和剤（*1）（400～800倍／収穫30日前まで／4回以内）を散布する。

※ダニエモンフロアブルは、かんきつで登録がある。

いちじく

9月の重点管理は、葉の光合成を高め、貯蔵養分を高めることである。貯蔵養分が十分でないと、来年の初期生育に悪影響を及ぼすこととなる。

◆枝葉の管理

果実の着色促進と葉によるすり傷防止のために行う摘葉（軸は残す）は9月上旬までとする。それ以降は、十分に貯蔵養分を蓄えることができるよう摘葉は行わない。

◆病害虫防除

長雨が続くと、葉や果実に疫病が発生し、早期落葉や腐敗果が発生しやすい。発生した場合は園外に腐敗果を持ち出し、アミスター10フロアブル（*1）（1000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。

◆秋肥の施用

みかん配合を10a当たり30～40kg施肥する。ただし、施肥量が多すぎると枝が遅伸びして貯蔵養分が消費されるため、枝の上位葉の状態を見て施肥時期、施肥量を判断する。

もも

◆せん孔細菌病対策

降雨や強風により発生が助長されるので、天候の推移に注意

＊1農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。
＊2農薬名の後の括弧内は、（10a当たり・1株当たりの使用量／使用時期／総使用回数）を表示しています。

営農総合センター　指導販売課 072（444）8001

する必要があり、9～10月に新梢に感染して越冬する。来年の感染源を減らすため、9月下旬～10月中旬にかけてICボルドー412（30～50倍／―／―）もしくはムッシュボルドーDF（500倍／開花前まで／―）を2週間程度の間隔を空けて2回散布する。ただし、高温時の散布では、薬害が発生する場合があるので使用しないこと。

かき

◆カメムシ対策

例年被害が多い園地では、園内の観察をきめ細かく行い、カメムシ類の発生を見掛けたら、スカウトフロアブル（1500倍／収穫7日前まで／5回以内）、または、アディオン乳剤（2000～3000倍／収穫7日前まで／5回以内）を散布する。

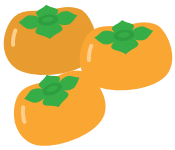

表1 たまねぎのは種時期

品　種	は種日	品　種	は種日
七宝早生7号	9月23日～9月25日	もみじ3号	9月28日～9月30日
アンサー	9月23日～9月25日	七宝甘70	9月30日（11月定植） 10月10日～10月15日（1月定植）
ターザン	9月25日～9月30日		

アブラナ科野菜（キャベツ、はくさい、なばな、こまつな、大阪しろな、チンゲンサイ）の根こぶ病対策

昨年根こぶ病が発生したほ場では、できる限り栽培を避け、アブラナ科以外の作物を輪作する。また、根こぶ病発生の恐れがあるほ場では防除を徹底する。防除は薬剤のみに頼らず、高うねにして排水を良くする、有機質資材を施用し土づくりに努める等、耕種的防除を心掛ける。

◆薬剤による防除

①は種、または定植10日前までに石灰質肥料を10a当たり100kg、堆肥を2～3t施用し、全面耕起する。乾燥時にはかん水する。

②は種、または定植前にネビジン粉剤を右記のとおり施用する。

表2 各作物のネビジン粉剤の使用方法

作物名	10a当たりの使用量	使用方法	使用回数
キャベツ	20～30kg	全面土壌混和	2回以内
	20kg	作条土壌混和	
はくさい、なばな、非結球あぶらな科葉菜類（こまつな、大阪しろな、チンゲンサイなど）	20～30kg	全面土壌混和	1回
	20kg	作条土壌混和	

表3 しゅんぎくのマメハモグリバエに登録がある農薬

薬剤名	IRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
カスケード乳剤	15	2000～4000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
トリガード液剤	17	1000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
アファーム乳剤	6	2000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
ベストガード粒剤	4A	10a当たり9kg（生育期株元処理）	収穫3日前まで／1回	―

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

※アファーム乳剤、トリガード液剤は、ハモグリバエ類で登録がある。

＊農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。